

いくつかの思い出

田代 弘

1. はじめに

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが設立されて、30年が経つ。私は、その翌年に採用されたので、もう、29年間この職場に在籍したことになる。この間、さまざまな遺跡の発掘調査に従事させてもらった。思い出深い調査ばかりであるが、とくに、心に残る事柄を記し、記念誌に寄せる一文としたい。

2. それぞれの思い出

1) 亀岡市太田遺跡

桂川の中流域は、大堰川と呼ばれる。太田遺跡は、大堰川の右岸に開けた沖積地の中にある。吉川小学校の近所の公園に事務所をおいて、自転車やバイクで、現場を行き来していた。稗田野中学校が近くにあり、中学生にからかわれたり、励まされたりしながらの現場通いだっただ。

後で、弥生時代前期～中期初頭の環濠集落遺跡であることがわかったが、私たちが経験が浅かったため、遺跡の全容を把握するまでに、試行錯誤を繰り返していた。真っ黒な土



写真1 亀岡市太田遺跡に参加していただいた人びと(1985)

層に切り込む遺構がなかなか見えず、炎天下で苛立っていた。中西さん(故人)が、軽トラックで運んでくれる麦茶と、昼の仕出し弁当を楽しみに過ごす現場の毎日だった。

遺跡の全体像がわかるまでに随分時間を費やした。岡崎さんと引原さんの機転で、サブトレンチを増設したところ、多重の環濠集落遺跡であることを明らかにすることができた。溝からは、土器類、石器類、木器類が多量に出土した。中でも、丹波古生層産の粘板岩を用いた石包丁生産に関する資料は重要なものである。

石器類については、当時大学院生だった榎原考古学研究所の豊岡君が分析してくれた。奈良文化財研究所の深澤さんの独自の土器論を初めて聴いたのも、この現場だ。彼らには今でも頭がಾಗらないが、親しくしてもらっている。

太田遺跡から出土した資料は、口丹波の弥生文化の成り立ちを語る上で欠くことのできない遺物として、亀岡市文化資料館展示室の入り口を飾っている。

(太田遺跡『京都府遺跡調査報告書』第6冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)1986

2) 亀岡市北金岐遺跡

亀岡盆地の中央を流れる大堰川の右岸に行者山がある。北金岐遺跡は、その東斜面でみつかった。南東に隣接には、弥生時代後期集落の南金岐遺跡がある。

私は、石井さんの補助として調査に参加した。調査が進み、この遺跡は、弥生時代後期から中世にかけての集落遺跡であることが分かった。弥生時代の植物繊維で編まれた被籠土器、古墳時代前期の堰遺構と田舟、鎌倉時代の建物跡群など興味深い遺物と遺構がたくさんみつかった。

木津川市の波多野さんや、枚方市の西村君、九州の大学にいる緒方君、毎日新聞社で大活躍している中坪君たちが、調査補助員として参加してくれていた。中世土器群の報告は、伊野さんの手ほどきを受けた中坪君が一手に引き受けてくれた。

現場が広いのと、見なれない遺構や遺物が出るので、困惑していたことを覚えている。石井さんは判断が手際よく、私はその判断についていけず、叱責を受ける日々だったように思う。しかし、この現場では、多くを学び得難い先輩を得ることになった。今でも彼の助言を、大切に受け止めるよう心がけている。

(北金岐遺跡『京都府遺跡調査報告書』第5冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)1985

3) 福知山市興・観音寺遺跡

由良川中流域の南岸にある、弥生時代中期を中心とする集落遺跡である。観音寺遺跡を黒坪さんが、興遺跡を私が担当した。

興遺跡では、環濠の一部と墓坑群が見つかった。環濠の底からまとまって出土した弥生土器は、この地域の弥生時代中期後半期の基準資料となっている。これらとともに出土した分銅形土製品も、ほぼ全体が残り、吉備方面からの搬入品の可能性が指摘されるなど、考古学的評価が高い。

観音寺遺跡では、弥生時代中期の由良川の旧流路跡の一部が見つかった。黒坪さんは、後に隣接地点を調査し、弥生時代中期から後期の集落跡を確認した。この調査では、一見するとセミに見える動物形土製品が出土し、物議をかもした。

当時、綾部市豊里に事務所を置いて、泊まりがけで調査をしていた。与謝野町の加藤君、高取町の富田君、高松市の川畑君たちが連泊して、度々手伝いにきてくれた。舞鶴市桑銅上遺跡にいた細川君もよく遊びに来た。小沼さん、田中さんは、数少ない女性補助員だった。

山の上で昼を過ごしたことがある。現場の近くの待避所に、食材を詰め込んだ寸胴鍋を持ち込んで昼食を作ったりした。本格的な石囲い炉を作り、杭を打って鍋を提げた。燃料は、その辺で拾った木っ端である。数日継ぎ足しながら食べたが、飽きて止めになった。芋を入れ過ぎたのが原因だった。

夜には、舞鶴湾にワタリガニや蛸を釣りに行ったりした。魚のアラを入れたみかん袋を棒の先につけて、岸壁に垂らしてそっと引き上げるのである。それを網で受けると、運のいい時にはワタリガニが三匹ぐらい取れた。これを餌にして、蛸を釣るのである。蛸の良いのが取れたと、遅くに青野に事務所を構えていた引原さんのところへ押しかけたりもした。夜釣りも良くやったが、釣れた後の処理が深夜にわたるので、次第に沙汰やみになった。

興遺跡から出土した土器、石器類の石材や遺構の評価について、黒坪さんや竹原さん、綾部市の近沢さん、舞鶴の吉岡さんたちと夜な夜な議論を繰り返した。熱かった日々が思い返される。

(興・観音寺遺跡『京都府遺跡調査報告書』第17冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)1992

4) 京丹後市弥栄町奈具岡遺跡・奈具谷遺跡

弥栄町に事務所を置いて、増田さんが中心となって国営農地関連事業の発掘調査を進めていた。増田さんは、この頃、遠所製鉄遺跡から出土した遺物の整理をしていて、製鉄関連の話をよく聞いた。夜半まで、鍛冶炉構造と炉底滓について熱心に解説してくれた。図を書き、実物の滓を持ってきては、鍛冶滓との判別の仕方を教えてくれた。水洗選別法による湯玉の検出方法が大切なことも教わった。この時の経験は、後に調査した奈具岡遺跡では玉類、浦入遺跡ではたくさん出た鍛冶炉跡の調査に役だった。しばらく、彼の手伝いをしていたが、奈具岡遺跡と奈具谷遺跡の調査を担当することになった。

奈具岡遺跡は、弥生時代中期後半頃に、大規模に玉類を生産した専門的な生産遺跡であることがわかった。管玉の穿孔具である石針の製作工程を示す一連の資料がみつかった。最初に岡崎さんが拾った玉髓製磨製石針が調査のきっかけとなった。

たくさんの石針未製品がみつかった。増田方式と福井県の富山さんに触発されて工夫した結果、得られたものである。この資料群は、石針を議論する際に、今でも、必ず取り上げられる。水晶製玉作り工房群は、翌年、河野君の調査で発見され、後に、一括して国の指定文化財となった。

石川の河村さんがご夫婦で見学に来られたことがある。この時、河村さんの取材データがぎっしり書き込まれたノートを見せてもらった。見入っていると、丸ごとコピーしてくれた。私の生涯の宝物として大切に保管してある。

奈具谷遺跡では、建築部材を転用した用材を使って作られた大がかりな水路跡がみつかった。下流の水量調節を目的とする灌漑施設の一部とみられる。その上流では、トチノキの実を加工したと考えられる施設がみつかった。大きな槽を縦割りして溝に取り付けたもので、付近には、箆や箕、木槌、トチノキの実の殻の集積などがあつた。この遺構は、奈具岡遺跡のある丘陵の眼下の谷間にあり、彼らの生業に関わる遺構と考えられる。北側の丘陵は、奈具遺跡である。若き日の釈先生、林先生(故人)たちが発見した弥生時代の集落遺跡である。墳墓跡もみつかっており、三つの遺跡は、居住域、水場、生産域として構造化できる可能性がでてきた。

奈具の丘陵の上は暑さで陽炎がたっていた。その向こうで汗をかく岡崎さんは、真っ黒だった。私は、谷間の清涼な湧き水の中で、裸足で作業をしていた。奈具岡遺跡の一番忙しい時期を岡崎さんが受けてくれたおかげで、奈具谷遺跡の複雑な構造物を処置することができた。これらの遺跡の調査成果は、彼に負うところが大きいと思う。

(奈具岡遺跡『国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡 昭和63年度、平成3・4年度発掘調査概要』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)1993

(奈具谷遺跡『京都府遺跡調査概報』第60冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)1994

5) 舞鶴市浦入遺跡群

舞鶴湾口の東側に位置する、縄文時代から中世にかけて続いた沿海性の遺跡群である。砂嘴で舞鶴湾と画された浦入と呼ばれる小湾に面して、多様な時代と性格がみられる遺構群が検出された。中でも、縄文時代と、奈良時代から平安時代に関する新知見は特筆に値する。

この調査は、火力発電所建設の事前調査として実施した。舞鶴市の吉岡さんが、分布調



写真2 松ヶ崎と呼ばれた砂嘴(縄文人の生活跡・丸木舟などがみつかった)

査と試掘調査を重ねた成果に基づいて、大規模な調査計画を立てた。吉岡さんは、海辺の縄文時代集落と、律令期の大がかりな製塩遺構を想定していた。この計画に基づいて、その約半分を私達が調査した。

舞鶴市の松本君が、湾奥で縄文時代集落の中心部を掘り当てた。土石流にのみこまれていて難しい対応を迫られたが、嘱託職員の水野君と相談しながら淡々と処置していった。土石流跡からは、中期の土器がたくさん出土した。下層では、前期の海進期の痕跡や、海進以前の遺構などが次々とみつかった。

縄文時代の古環境を調べるために、奈良教育大学の金原先生に土壌分析をお願いした。花粉化石が色々見つかり、当時の植生の移り変わりがわかった。寄生虫卵が縄文遺跡としてはとても多い事に驚いておられたのが意外だった。縄文時代の浦入遺跡には、予想以上に多くの人達が暮っていた事がわかったのである。

その頃、私達は、湾の入り口付近を探索していた。湾の西側に位置する砂嘴は、松ヶ崎と呼ばれていた。この地点は、一見すると遺構が希薄に見えるが、吉岡さんはこの場所に興味を示していた。縄文時代の船着き場、あるいは丸木舟があると信じていたからである。砂嘴の付け根を調べ出した頃、現場では深刻な人手不足になっていた。製塩遺構が広大な範囲にわたる事がわかり、筒井君と私では対応しきれなくなったのである。そこで、急遽、石井さんにバトンを渡した。

松ヶ崎の付け根あたりは、大量の土砂が運ばれ、その除去が大変だった。掘り進んでも砂ばかりで、遺構を検出できる望みは見込めない様子だった。ある日の事、石井さんから電話連絡があった。丸木舟がでたと、いつもの冷静な声色だった。最初は冗談かと思えたので、急ぎもせず、自分の担当地区で作業をしていた。暫くして、吉岡さんが切迫した様子で現場の様子を説明してくれた。現地関係者の中で、丸木舟の出土現場を見たのは私が最後になって、仲間から響きをかかった。

丸木舟は大きなもので、内陸水路に繋がる場所ではないこと、海性堆積物に埋もれていたことから、海に漕ぎ出す丸木舟であることがわかった。放射性炭素を用いた年代測定では、現在から五千年以上前に作られたものであることもわかった。

吉岡さんの推測が的中したが、少し残念な気持ちもあった。石井さんに油揚げを持っていかれてしまったという口惜しさである。彼はそれを察してか、一緒に報告文を書く事を勧めてくれた。この丸木舟は、舞鶴市横の赤煉瓦倉庫、通称、まいづる智恵蔵の主演として、多くの見学者を集めている。

律令期の製塩遺構は、湾岸全体に分布している事がわかった。飛鳥時代に始まり、奈良時代初期に湾岸斜面を開墾、大規模な土器製塩現場が経営されていたのである。

生産初期には、与社という墨書から、宮津市府中あたりから官人が派遣されて塩蔵を管理していたらしいこと、奈良時代後半以降になると、地元の有力氏族である笠(加佐)氏が現場経営に乗り出していたらしい事が、徐々に明かになっていった。

製塩土器の年代観についても、若狭地域での調査結果をもとに作成された編年案に整合しない点が多く、若狭編年自体を見なおすきっかけとなった。ここでは、少なくとも12世紀後半以降まで土器製塩が行われており、11世紀代には終焉を迎えるという従来の説を再検討する必要がでてきた。土製支脚の出現問題も然りである。この事については、若狭高校の入江先生、富山県のガビンスキーこと、岸本雅敏さんに助言をいただきながら私見を述べた所である。最近では、福井県美浜町の松葉君がこの問題に取り組んでいる。福井の赤澤君にも資料面で協力を得た。

浦入製塩遺跡は、丹後国の国府が存在した可能性が高い与謝地域と関係深く、そして、同時期に稼動していた弥栄町遠所製鉄遺跡群との関連も考えられる臨海性の生産遺跡なのである。

この遺跡群の調査では、大切な仲間ができた。酒豪の筒井君である。この現場は、彼の地道な努力なくしては終了をむかえることができなかつただろう。報告書図面作成も然りである。彼の姿勢に見習うべき所が多い。

浦入遺跡は長丁場になった。瀬崎の水谷夫妻には、数年間にわたり部屋と食事を提供し

ていただいた。私たちの生活と健康を支え、現場を支えてくれた。真夏の休日にはご主人が得意の素潜りでアワビやサザエ、岩牡蠣を採り、海鮮料理を振る舞ってくれた。アワビの鉄板焼き、サザエのちらし寿司が特にうまかった。カサ貝の炊き込みご飯は隠岐の名物として知られているが、瀬崎でも季節料理として行われていることを知った。初夏のワカメ、梅雨時の海そうめんなどの海草類、秋の貽貝、ワタリガニ、冬の赤なまこも酒肴として最高だった。瀬崎では、初夏から秋にかけて鱧、カサゴの類、大丹生では夏場に型のいい鯰が釣れた。小橋では、大丹生で釣った生き鯰を餌にしてアオリイカを狙った。鱧を冷凍しておいて、ヒラメを狙ったりした。水野君は、かかったアオリイカがあまりに大きいのもったいなくて冷凍保存した。結局、悪くなって無駄にしてしまった。取るとき虫がついたと、整理員さんにからかわれていた。照れ顔が懐かしい。

(浦入遺跡群『京都府遺跡調査報告書』第29冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)2001

6) 野条遺跡

南丹市八木町野条・室橋にある弥生時代から中世にかけての集落遺跡である。南丹市や京都府教育委員会の調査で、遺跡の規模や内容が明らかにされつつある。

私は第7次調査を担当した。調査地付近はクロボクの再堆積土が厚い。遺構は、地山である黄色粘土に達しないものも多く、調査が難しい。その上、この年は雨が多かったから、作業に従事された方は大変だったと思う。この調査で検出できた遺構は少なかったが、大きな成果があった。弥生時代後期末ごろの火災を受けた住居跡が見つかったのである。

火災で焼けたのは、方形の竪穴式住居である。住居の床には、炭が一面に広がっていた。屋根材などが燃え落ちたものである。炭を少しずつはずしていくと、住居中央に集まるような放射状の炭の線が現れた。垂木材がそのまま焼け落ちたものらしい。土器も火災当日に置かれたままの状態で見出された。屋根材に黄色土が用いられていたようで、これが火伏の役割を果たし、建物が蒸し焼き状態になったようだ。

土器は、手焙り形土器や、北陸から運ばれてきた長頸壺、地元産の壺・甕、他地域産の甕など多様である。鉄鏃や弧帯文を陽刻した小形の磨製石製品などがあった。

これらの遺物群は、高野さんには魅力的であつたらしく、現場で興奮気味に議論していた様子を覚えている。研究論文や発表資料によく引用してくれ、今でも大切にしてくれている。彼女は、この後、野条遺跡、室橋遺跡で調査を重ね、当該遺跡の解明に取り組んでいる。

火災を受けた竪穴式住居跡の調査は初めてだったので、手順通りとはいかず、創意工夫が必要だった。足場の確保に始まり、炭化物の除去順序、各段階での記録の方法など、段



写真3 南丹市八木町野条遺跡の火災住居跡

取りを細かく立てる必要があった。遺構の掘削、記録にはこの作業を専門的に補助してくれる人が必要である。

そうした人がほとんど集まらない中、活躍してくれたのが天池さんである。彼女は、測量、図面作成、遺物取り上げまでを円滑にこなしてくれ、充実した記録作成に貢献してくれた。彼女とうまくやれたのは、彼女が釣り好きであったからだと思う。月曜に週末の釣果を聞くのが楽しみだった。私は専ら鱈であるが、彼女はアオリイカである。携帯で撮影した釣果を見ながら、嬉しそうに話してくれたのだった。

彼女はその後、南丹市八木町城谷口古墳群、園部城跡などの調査で経験を積み、亀岡市域で実施されていた国営農地土地改良事業関連遺跡の調査へと活躍の場を移していった。この事業は対象面積・件数がとても多く、縄文時代・弥生時代の集落遺跡、古墳時代後期の横穴式石室群、奈良時代の官衙跡、丹波国分寺へ供給した瓦窯跡、中世の集落群など、多岐にわたる遺構群を限られた時間で的確に処置する必要があった。彼女はこの多くの野外作業にかかわり、多くの人と接した。そうした彼女を、私などは国営のマドンナと呼んだが、これは揶揄していたわけではなく、誠実な作業態度に対する敬服の念をこめた愛称である。

その彼女を射止めた男がいる。石崎君である。かれは、ザッキーと呼ばれ、暴れん坊の印象があるが、ルーア好きの、実に繊細な人物である。彼ら、方法は違うが、釣りで意気投合したに違いない。彼らが結ばれたのは私が病床に伏していた頃で、祝いの言葉をいま

だに手向けられないでいる。二人には、これまで公私にわたりずいぶんお世話になった。私が彼らのために役立てたことが何かあったらうか。

野条遺跡は、高野さん、天池さんを通じて石崎君との不思議な縁を結ぶことになる現場となった。

(野条遺跡『京都府遺跡調査概報』第110冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)2004

7) 松田遺跡

大山崎町松田でみつかった集落遺跡である。石尾さんが調査した地点では古墳時代後期の住居跡群がみつき、集落が周辺に広がっていると想定された。2010年、北東に隣接する場所を調査することになり、古墳時代集落を検出する意気込みで臨んだ。しかし、この地点では、古墳時代の層位が流失しており、中世になって形成された集落跡がみつかった。柱跡、井戸、石組み遺構などが検出され、瓦器類を主体とする食器類がたくさん出土した。

この遺跡で、岡崎さんと久々に一緒に仕事をするようになった。南丹市八木町池上・古里遺跡以来なので、およそ8年振りである。彼は、複数の仕事を段取り良くこなすひとになっていた。かつては、どちらかといえば引っ込み思案で、おとなしい性格だった。今は、澁刺として仕事を楽んでいる風である。年を重ねるごとに力強くなる、不思議な人物である。



写真4 南丹市八木町池上・池上古里遺跡の調査に参加していただいた人びと(2002)

とある日の昼休みの事。川端さんが、現場に立ち寄ってくれた。三山木遺跡で調査に協力してくれた方で、岡崎さんと共通の知人である。どうやら、私の近況を耳にして見舞いにきてくれたらしい。彼女とは8年振りの再会であったが、先ほどまでそこにいたかのような気安さを持った人である。身の回りで起こった出来事や身の上の出来事などを話したり聞いたりするうちに、心が安らいだ。

発掘現場は多くの人との行き交いがあり、出会いがある。大切な出会いは数少ないが、彼女はその中の一人である。

(池上・古里遺跡『京都府遺跡調査概要』第103冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)2002

(三山木遺跡『京都府遺跡調査概要』第106冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)2003

3. おわりに

三年ほど前のことだが、日頃の精進が悪かったせいか、病を得て休職した。心が壊れ、身体的機能の一部と多くの記憶を失った。いまなお、治療薬に頼って日常生活をなんとか維持している。この間、上司と多くの同僚に助けられてきた。そのおかげで、身体機能はほぼ回復し、失われた記憶の一部を取り戻しつつある。

この記念論集には、当初、友人の協力をいただきながら論考を用意したが、果たせなかった。戻った記憶を整理してそこから一文を書け、という先輩の助言に従い、散文にして義務を果たす事にした。偏った内容であるがご寛恕いただきたい。

本年、当センターは30周年の節目である。展覧会、講演会、記念誌の刊行など、行事が目白押しである。多くの調査員が関わって賑やかにやっているのを見ると励まされる。私も、彼らの活気をもって、復調の道筋を見通せる年にしたい。

本稿を、30周年を迎えた当調査研究センターと、私の快復をあたたく見守ってくれている上司の方々、同僚の方々に、捧げたいと思う。

なお、本文を作成するに当たり、下記の方々の励ましをいただいた。

牧隆平、深澤芳樹、近沢豊明、豊岡卓之、赤澤明德、辻川哲朗、安田正人、岡崎研一、出口三平、久後生歩、西山明、山本慎之介、森岡幸一、井上市郎、大手一博、高野陽子、柴暁彦、川端美恵、松下道子、丸谷はま子、清水友佳子、茶園矢壽子、鍋田幸世、長友貴子、木村涼子、水谷日出朗、水谷富美子、菊池京子(順不同敬称略)

(たしろ・ひろし=当調査研究センター調査第2課次席総括調査員)